

2013年秋号

青峰同窓会会報



会長挨拶

鈴鹿高専100年に向かって新たなスタートです。



青峰同窓会 会長
小手川 智
 (42C 卒)

同窓会員の皆様におかれましては
 お変わりなくご健勝のこととお喜び
 申し上げます。

昨年は鈴鹿高専創立 50 周年式典並びに祝賀会が盛大に挙
 行されました。偏に同窓会員の
 皆様のご支援ご協力のお陰と感謝
 謝し厚くお礼申し上げます。この
 記念行事がきっかけでクラス

会やクラブ OB 会等の集会が開
 催される機会が多くなったと聞き及んでおり、良かった
 と喜んでおります。

母校と OB との活動をご紹介します。昨年 9 月から
 44M 澄野久生君が中心となって準備、計画して今年
 3 月に「鈴鹿高専テクノプラザ」と称する産学官連携
 組織を設立しました。設立の目的は下記の通りです。
 詳細は鈴鹿高専のHPをご覧ください。

- 企業の技術活性化に、鈴鹿高専の人的・知的技術
 資源を活用し役立てる。
- 地域産業界の連携・交流を深め、地域産業の発展に、
 鈴鹿高専と協働する。
- 企業の参加で、鈴鹿高専の教育研究の振興に協力する。

学校創立 50 年を機に社会貢献の一貫とするもので
 す。現在 44 の企業、団体、個人が参加しております。
 ちなみに会長は 50M 川口宗弘、副会長には 51H 藤川
 勝彦の両君が就任しました。企業のものづくり支援の力
 になっていきますのでご期待ください。

三重県では今年伊勢神宮式年遷宮で様々な行事が行
 われ、大変な賑わいになっております。10 月 2 日に内
 宮で、10 月 5 日には外宮で「遷御の儀」が行われました。
 新正殿はヒノキ造りで、ヒノキの香りが漂う荘厳にして
 神々しい建物となっております。三重に帰郷の折には是
 非お参り下さい。

先日東京オリンピックが 2020 年に開催されること
 が決定いたしました。1964 年の東京オリンピックは 1
 期生が 3 年時で学校は期間中休校と言う粋な計らいで
 した。今もその時の競技の光景が鮮明に思い出されま
 す。鈴鹿高専からオリンピック出場選手が出てくること
 を期待しましょう(鈴鹿高専出身、現筑波大大学院生
 の衛藤昂君に注目)

同窓会会員の皆様には今後とも変わらぬご支援とご
 協力をお願いしてご挨拶とします。

もくじ

会長挨拶 1
 卒業生便り 2
 ◆ 恩師と50年 (加藤先生を囲んで)
 ◆ 陸上部創部50周年記念OB会 山本俊二 (47E卒)
 ◆ 陸上部有志お白石持ち行事に参加 伊藤豊嗣 (42M卒)
 退職教職員 7
 ◆ 奥 貞二 教授 (教養教育科・人文社会)
 ◆ 桑原裕史 教授 (電子情報工学科)

◆ 篠原雅史 講師 (教養教育科・数学)
 新任教職員 9
 ◆ 板谷年也 助教 (電子情報工学科)
 ◆ 飯塚 昇 教授 (電子情報工学科)
 ◆ 飯島和人 助教 (教養教育科)
 ◆ 渡邊潤爾 助教 (教養教育科)
 訃報 12
 ◆ 木村典夫先生を偲ぶ 岩田政司 (50 C卒)

卒業生便り

「恩師と50年」

伊藤 栄一 (48 E卒) 応援: 藤原孝弘 (56 E卒)、石川ひろみ・西尾真澄 (57 C卒)

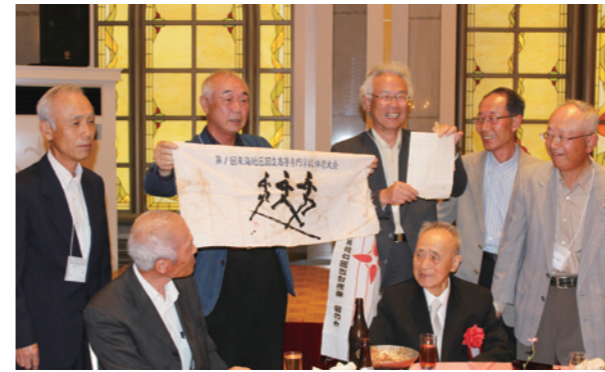
数学の加藤政寿美名誉教授が、今年で米寿を迎えられました。派手な事が昔からお嫌いな先生に「加藤先生を囲む会」という事でご了解を得て、5月19日に矢野元学校長をはじめ旧5教職員と卒業生他52名で開催しました。「退官」「叙勲」「傘寿」と、茶道サークルのOB会(香風会)を中心に記念の会を催してきましたが、今回は「囲む会」ということで担任をされた1期の先輩方にも多数参加していただくことが出来ました。「恩師と50年」と題して投稿させて戴きました。

「数学の加藤政寿美名誉教授」は、大正15年11月名古屋市熱田区の旗屋町生まれ。鈴鹿高専の創設時からの名物教授(専攻は解析学)。チョークを1本だけ持ち教室に。しかし、非常に分かりやすい授業で生徒からの人気は絶大。小柄で、いつも飄々と。でも威厳があり、学生にも教職員にも妙に信頼されていた不思議な先生。それに何といても凄かったのは「煙草と酒」。両切りのピース2缶、晩酌に剣菱を熱燗で3~4合。それを365日一日も欠かさず。3年前に一切やめるまで何と63年間でタバコ

は、9万2千本(タール2.6kg)。酒は、8千升にも。160cm・50kg弱の身体のどこに? そんな無茶をやられた先生が、米寿を迎えられても「脚以外は、ピン・シャンとお元気でいらっしゃる」。この事が、我々参加者にとって一番嬉しかったことです。

「香風会」とは、加藤先生が顧問をされ、今でいえば「山本八重」のような奥様(昭子先生)が、指導しておられた現茶道部(当時は茶道サークル)のOB79名の会です。第3回のOB会を昭和54年5月5日に開催した際に白子のお稽古場にて「風香る五月」に因んで「香風会」と命名しました。ただ35年の歴史があるにも関わらず会長も未だに存在しない摩訶不思議な団体です。茶道に関係なく事ある毎に「まあお久しぶり(わかる人はわかる。)」という奥様先生のお言葉に甘えて官舎(南旭ヶ丘にご自宅を構えられてからも同様)に入りびたり。取っ替え引っ替え誰かがお邪魔している状態。でも先生が、ご健在のうちは、このようなお付き合いを今後もさせて戴くつもりです。

「囲む会」には、矢野元学校長と数学科の斉藤・横



山両先生がご来賓として、又鈴木満子さん・松浦幸代さんのお二人が、旧職員として参加を戴きました。卒業生としては、初めて担任をされた電気科を始めとする1期生9名。2期生2名・3期生1名に香風会の25名が参加しました。発起人の趣旨説明に続き「共に米寿でもあり<長寿の秘訣>と<教え子に後押ししてもらい共に楽しく生きましよう>」という盟友であられる矢野元学校長のご挨拶、小手川同窓会長の乾杯に引き続き、斉藤先生からは「数学者の先輩」として、星野先輩からは「人生の岐路で大きな影響を受けた人生の先輩」として、先生に対する心のこもったご挨拶がありました。

歓談中は、奥様やお孫様に車椅子を押して戴き先生は、精力的に全テーブルを回られました。特に45年ぶりにお会いになった1期生の先輩方の席では、当時の懐かしい話に花が咲き中々次の席に移動していただけず大変でした。が、お陰で大変盛り上がりました。

<8月18日に食事会>



急遽写真のメンバーで食事会を開催することになりました。その理由は「出来るだけ多くの人の声を掲載して欲しい。」という同窓会報ご担当の6期生北村先輩からご依頼があったからです。当初のご依頼により、世話役の慰労会で掲載する写真を決め、原稿も纏まりかけた時に(高専の良き伝統である先輩と後輩の関係は今も脈々と)。ならばと、丁度当日のビデオの編集も出来上がっており、会場となったプラトンホテルで、食事会を開き皆さんの声を集めることにしました。当日は連日の猛暑続き。ご高齢にもかかわらずお元気に

会場にお集まりを戴き大変恐縮しました。盛況の内に無事に囲む会が終わったことのお礼と集まっていた趣旨を私から説明させていただき始めました。ノンアルコールビールは、今非常に味が良くなった事と「ノンアルコールなら良いでしょう」と奥様から許可が出たことで加藤先生に乾杯のご発声をお願いしました。ノンアルコールではありますが、名前は歴記としたビール。3年ぶりに口にされた先生の笑顔に、嬉しさの余り、つい禁酒されていることに対する遠慮が薄れ、すぐに冷酒をぐびぐびとの状態となりました。(でも本当に嬉しかったです。)

本題の皆さんの声を紹介しますが、さすがに矢野先生は場数を踏んでおられる。寄稿の文章を準備されて参加されており、「はい原稿」と言って渡されてからは、ぐいぐいと。紙面の関係で抜粋して掲載させて戴きます。

(略) 加藤先生が学生を限りなく愛されていた結果、卒業生が「先生がいつまでも健やかに」と希ってこのような催しを計画された事を、鈴鹿高専の教育の原点はここにあったと私としては嬉しく思った次第です。」(略)「鈴鹿高専の教官1期生は、木村学校長以下9名でしたが、今生きている者は加藤先生、歴史の水野先生と私の三名のみ」(略)「昭和40年11月13日に鈴鹿高専で、当時聖路加国際病院内科医長であった現聖路加国際病院理事長野日野原先生(101歳)が「心とからだの科学—転換する医学の動向」という題で公演された。日野原先生のお話を直接お聞きした自分もあやかり、百歳近くまで生きたいと思った次第です。加藤先生も私と一緒にあの体育館でお話を聞いた仲間です。私と二人、教え子に後押ししてもらいながらこれからも元気で、且つ楽しく生きましよう。」

司会: 寄稿文の中にある「鈴鹿高専の教育の原点」を見事に実践したわけですが今回参加して戴いていかがでしたか。

太田見先輩: お会いしたいと常々思っており、この機会に実現されて大変嬉しかった。又、一廻り、二廻りも離れた後輩たちと色々な話をし、実に頼もしく感じた。小手川・星野両先輩も同感と大きく頷かれた。司会: 「米寿のお祝い」とせず先生のご希望通り「囲む会」とした事で諸先輩方にある意味気軽に声を掛けさせて戴くことができました。又担任ではなかった化学科のOBに声を掛けることが出来たのは「2013年冬号の青峰同窓会会報」のお蔭です。実は、星野先輩が人生の岐路に立った時に加藤先生の「大きく、大きく胸を張って我が人生に悔いなしといえるまで思う存

分生きてくれ給え」の言葉に迷わず突き進めば良いとの結論を得た。と寄稿された記事があったからです。

星野先輩：実は平成二年の同窓会会報に同年三月に退官された加藤先生が寄稿された「卒業生の皆さんへ」に書かれていたお言葉でした。

小手川先輩：青峰同窓会立ち上げから携わり同窓会報の充実に努力してきた関係者としては大変嬉しく思います。近頃はクラス会や同窓会の記事が多く寄稿されるようになってきており今回のようにクラブを中心とした縦断的な集まりに私自身参加できたし、是非投稿していただけるよう事務局の北村君を通じお願いした次第です。

司会：化学科のOBが沢山参加された原動力には、担任をなさっていた矢野元学校長が参加された事も。

矢野元学校長：実は化学科の教え子から「是非米寿のお祝い会を」とお話を戴いたが、米寿なんて目じゃない。百寿ならとお断りしていたので、囲む会で会うことが出来大変嬉しかった。

司会：縦断的な繋がりに欠かせないのが同窓会・クラブ。(ここら辺りからレコーダーの調子が今一であった事と酒の勢いで活発に意見が飛び交ったため略称で記載しています。)

先輩方：先生がご存命中はこのような会が企画しやすいが、今後は、支部会のような組織を立ち上げ、運営企画をしてほしい。

関西、関東支部を創り、会を頻繁に企画してはどうか。同窓生の縦の繋がりを強く保ち、情報交換することで、後輩の活躍に繋がると思う。

いずれにしても求心力の頂点として先生方に元気で

長生きしていただきたい。

先生方：納得。頑張ります。

司会者：「他に在學生や最近の卒業生について何か感じられたことはありませんか？」

先生方：「伝統ある校歌を歌えない学生が増えているのではないか」「学生を見ていると、10年程前から急に生活環境が変化し、昔の学生とはかなり違ってきている」と具体的にお話されましたが、酒量も多くなってきた為か、今の学生の方がまともで、我々昔の方が異常ではとも思える内容も多々あり、ご紹介を割愛させていただきます。(古き良き時代とお察しください。)

司会：「いろいろと、懐かしいお話やご意見ありがとうございました。皆さまのご意見を同窓会会報に投稿させていただきます。本日はありがとうございました。」で無事に終了した訳ですが、一期生の先輩とのお話は、後輩を思う内容ばかりで、母校への熱い思いに触れることができました。

(食事が終了した会場で二人の後輩主婦とICレコーダーの録音内容をもとに原稿を練っていますが、もう5時に。それぞれのお家から電話が掛かって来ました。それでは失礼します。)

<加藤先生直筆の俳画>

皆さん加藤先生が沢山の俳画を書いているのをご存知ですか？

昔飲んだコップ酒を懐かしく思う気持ちが込められた作品です。



陸上部創部50周年記念OB会

1. OB会の開催、一泊で

2013年8月31日～9月1日、伊勢二見浦の地、伊勢神宮式年遷宮行事にあわせ、一期生を中心にOB会を開催。年を重ねるごとに、回を重ねるごとに、どんどん盛り上がる。これが鈴鹿高専陸上部OB会の現状である。猛暑の中での合宿、雪の降る中での駅伝、ただただ「走る」という一点の共通項で結ばれた仲間である。あれやこれや、前置きはいらぬ、単刀直入・ストレート球の投げあいで、一泊二日はあっという間に過ぎてしまった。今の年齢も、今の仕事も何にも関係なし、過去に同じ経験をした仲間、

山本 俊二 (47E卒)

それも、楽しいことだけでなく苦しいことも含めた時間と空間の延長上にあるのが、OB会である。

2. 口は悪いが、心の友

OB会場付近の写真を見て欲しい。写真は、伊勢二見浦の夫婦岩から見える朝で、OBのスナップショットである。これを見て、心洗われる気持ちにならない方はいないだろう。宗教心とは無関係に何か新たな決意も生まれる場でもある。この風景写真と同じ気持ちにさせてくれるのが、同じ釜の飯を食った仲間である。一見、口の悪い人ばかりに見える

る集団だが、また、事実として口はかなり悪いのだが、皮剥けば、夫婦岩と同じく、しめ縄で繋がった仲間である。何の利害もない心の友である。



3. リーダの決意、皆出席

今回我々は、まずは年寄りのほう、一期生がいたい顔を知っている範囲までの集まりにしたいと思ってスタートした。一期生伊藤豊嗣さんをリーダーとして、名古屋、伊勢などで何度か事前検討を行った。OBや、あるいはそのご家族の中には、残念にも既にこの世にはおられない方が数名ある。我々は永遠に生き続けられるわけではない。今回の50周年の区切りが、ひよっとするとお会いできる最後になる方がいるかもしれない。そうなることを望んでいるわけではないが、考えておく必要はある。そんな、ほんの少し悲壮感も漂わせながらの検討でもあった。そのため、今回のリーダーの決意は、一期生付近中心ながら「全員出席！」。お体の不自由な方や、病气入院中の方もおられる。伊藤豊嗣さんが確認される情報の数々で、OBの消息がどんどん明らかになっていった。OBの誰もが知らないまま、天国に召された方も明らかになった。消息を知るとは、本当に嬉しいものである。と同時に、人ごとではないのである。

4. 伊勢二見浦、景勝の地

OB会の開催場所は、景勝地二見浦を選んだ。今回、地元中部地方はもとより、広く関東関西からOBが集まってきた。自家用車で来た方もあったが、大半は列車利用。近鉄伊勢市駅で降車、JRに乗り換え、1両だけの列車でコトコト揺られて10分弱。JR二見浦駅前を出て徒歩1分の民宿ヤマトに着く。最新のホテルとは違い、まるでOB会のためにあるような施設。陸上部合宿所と思えば、ピッチャシである。チェックイン時刻などお構いなし、肝っ玉母さんとマスコット犬ヤマトが待っていてくれた。夕刻の大懇親会まで、伊勢の内宮外宮に行くもよし、景勝二

見浦に行くもよし、二見浦海水浴場で泳ぐもよし。三々五々に民宿に集まり、夕刻まで自由。皆それぞれに時間を使う。二見浦の景勝夫婦岩は、OB会参加者の年代では近畿一円の小学校の修学旅行地。筆者も50年ぶりに夫婦岩を見、小学六年生当時との印象の違いに愕然とした。時代と共に、人の心を動かすものは変化する。唯一、多感な頃に触れ合った出来事だけが永遠に生き残る。それがOB会である。

5.50周年記念、大宴会

OB会には、青峰同窓会の小手川智会長がはせ参じてくださった。大変ありがたかった。陸上部を指導し続けた勝田観先生ももちろん中心出席メンバーである。各学年数名の陸上部員がいるが、今回は一期生から七期生までが対象。参加者総勢23名。ご健康など事情があり、どうしても来られない方を除くと、参加率は実に7割、卒業後40年以上たっている仲間の出席率とは思えない高い数字である。写真に写っているメンバーはごく一部。あまりの盛り上がり、全体写真を撮っていないことに、誰一人として気付かなかった。逆に言うと、久しぶりに会った仲間と大事な時間が流れていき、全体写真など思いつく暇さえなかったということ。

懇親会前の酒の入らないときに、一人一言近況報告をしていただいた。会場におられることが、実は近況そのものなのだが、大宴会の際お互いが話し始める口実作りを、リーダーが演出したしかけでもある。おかげで、報告会と懇親会の境がなにやら分らないくらい自然に次へと進んでいった。夕刻スタートした大宴会は、座敷という設備の利点を生かしきり、あちこちに車座ができた。イス席ではこうはならない。年代を超え、会わなかった数十年の時間を飛び越え、オレお前の盛り上がりがあった。若くはないメンバー達は、午前2時まで大いに騒ぎまくった。さすがに、酒は往年ほど飲んではいないが、騒音防止上、民宿を借り切ったのは、正解であった。



6. 運営の心得、たまの参加は敷居が高い

今回伊藤豊嗣リーダが最も腐心したのが参加者増である。これがなかなか難しい。誰しも、心の隅に引っかかることを二三持っている。「オレ、長いこと欠席の連ちゃんだったから、どうしようかな」、「今仕事は絶不調。こんな顔仲間に見せたくないな」などいろいろある。人生の波は誰しもあるから、皆お互い様だが、結果、欠席者が増え、出席者側の失望につながってしまうことがままある。こんなときの出番が、推進リーダである。例えば、長年欠席の方が隅っこでぼつとならないよう、懇親会の席順はくじで決める。全員の挨拶は通例でも、成功者の自慢話を長々させない、すぐ終われとはっきり言う。つらい話も皆で明るく聴く。当たり前と思われかもしれないが、この辺の配慮ができる人は、誰でも、とはいかない。こんな嫌われ役をかって出る方がいるかどうか、会のわかれ目である。

7. クラブ活動だけではない、同じ釜の飯

クラブ活動は、確かに人間関係が濃密である。短期間ではあっても24時間共に過ごす日が続く。しかし考えてみれば鈴鹿高専そのものが濃密な組織で

ある。五年間クラス替えはなく、一年次の仲間は五年次の仲間でもある。そのため、クラス会も頻繁に行われていると聞く。私自身もごく最近同期47年卒電気工学科のクラス会に榊原温泉に行ってきたところである。当然こちらも懐かしい。

8. おわりに、OB会に行こう

鈴鹿高専の卒業生は、50周年の数字が示すとおり、50期を超えた長い道のりを歩んできた。半世紀のうねりの中、現在、15歳の入学生から65歳を越えた仲間がこの世に存在する。生活の糧を得るために必死で働いている方、病気療養のため一息休憩している方、人生の折り返しを過ぎてまだまだ意気盛んな方、稼ぎは次代に引き継がれた方、病身ながら研ぎ澄まされた頭脳をお持ちの方、人それぞれである。ただ、それぞれの人には、いついつまでも、何の意味もないかの無駄話を言いあえる関係、同じことを共に懐かしめる関係が必要と思う。その答えの一つが、OB会である。OB会の輪が、世代を超えどんどん広がることが必要な時代である。

◆陸上部有志 お白石持ち行事に参加

8月31日の陸上部の集会に参加したメンバーの中から10名とその家族3名が、翌日行われた「北浜連合」の外宮へのお白石持ち行事に参加しました。

6年前、伊勢に住む2期生の浜口宗幸君の配慮で、その地域で結成する「北浜連合」のお木曳きに参加ができましたが、今回は遷宮行事の最終となるお白石持ちに参加させてもらえることになりました。台風の襲来で天候が危ぶまれましたが、絶好の日和となり無事お白石を新しいお宮に奉獻することができました。一般の人間では、この時でしか入れない正殿の横を通った時には、身の震える思いを感じました。



■ 遷宮前の外宮正殿前にて
後列左より・伊藤妻・島田・小手川・祖父江・勝田・松岡・小島・伊藤
前列左より、島田娘・同妻・丹羽・田中・西井

伊藤 豊嗣 (42M 卒)

退職教職員

(平成25年3月に退職された方々)

嘱託教授となって

平成25年3月に定年退職しました。32年間の教師生活、5年間の学生生活を入れると、37年間鈴鹿高専で過ごさせていただきました。この長さは私の人生に大きな影響を及ぼしました。本当に色々有難うございました。色々変化したことがありますが、自分の研究室、経済的な面、授業時間数、中でも一番大きな変化は、鈴鹿高専をいわば横から見れるようになったことです。全ての役職から離れて、高専をいわば客観的に見える。そこから見た感想を述べることにします。

私については、嘱託教授として引き続き、同じ科目を担当することになりましたが、2年生の倫理社会が半期合併講義となりました。それで私の後任には、経済がご専門の、渡辺潤爾先生が着任されました。活躍を期待します。私が今取り組んでいるのは、日本に存在しなかった西欧の哲学思想の考え方を、分りやすく紹介する本の作成。日本語に入っているラテン語ギリシア語の由来と解説。日本人の考え方の特徴。この3テーマについて、目下奮闘中です。もちろん山登りとテニスと謡曲の練習は続けます。この8月1～2日に、富士山に学生と一緒に登ってきました。天気には恵まれたのですが、ご来光は、霧がかかって拝めませんでした。テニスは、今年も、三重県教職員テニス大会に参加します。

鈴鹿高専については、改修が進み、電気電子工学科、クリエーションセンター(旧実習棟)は、既に改修が終わり、材料工学科、機械工学科は平成25年度

教養教育科・人文社会
奥 貞二 教授



中に、加えて、第3寮と、管理棟1号館とも、改修予定に入っています。新しく、新田校長の下に、井瀬副校長、澤田学生主事、江崎寮務主事の3主事の元に51年目を順調に進んでいます。1つ余計なことかもしれませんが、斉藤正美先生は米子高専の校長に、桑原先生は都城高専の校長に栄転され活躍されています。このような経緯で来ると、誰が何処の校長になるのかなと思ったりもします。去年は、ロボコン全国大会で、第4位にまで食い込み、新しい鈴鹿高専像ができつつあるところです。

日本については、異常気象をはじめとする様々な自然災害、世界に例を見ない高齢化社会、1千兆円を越す国の借金、世界で1番高い製造業に従事する人々への賃金、TPP参加交渉等。誰が見ても厳しい状況であり、誰が上に立っても、一歩誤れば国家存亡の危機にまで連なる現実であります。こういう状況の下であっても、高度な技術、新しい製品開発をする能力、アイデアを生み出す知性、色々な国で技術者としてやっていく積極性等は、益々必要とされ、その意味で高専は厳しいけれども、日々の努力と前進をする余地が残されています。

色々な分野で活躍する卒業生を見習い、目標とし、そしてその人々をも乗り越える意気込みで在校生諸君、これから続く人々は頑張ってください。

鈴鹿高専の思い出を胸に

月日の経つのは早いもので、私が鈴鹿高専にお世話になって40年近い日々が過ぎました。工業化学科に助手としての仕事をいただいたのは昭和49年、当時は初代校長の木村和太郎先生が現役でご活躍でした。その後、矢野弥校長、久保田郁夫校長、戸田成一校長、勝山正嗣校長、中根孝司校長、高橋誠記校長、新

電子情報工学科
桑原 裕史 教授



田保次現校長と8名の校長が就任されました。鈴鹿高専すべての校長と一緒に仕事をさせていただいたのは、私を含め、ほんの数名になってしまったと思います。卒業生や教職員OBOGの皆さんにとっても、当時の校長先生の名前を



■ 都城高専専攻科棟

目にして、鈴鹿高専での生活を懐かしく思い浮かべておられるのではないかと存じます。

電子情報工学科が平成元年に新設され、私は翌年、当学科に配置換えとなり、平成25年3月までお世話になりました。その間、周りの方々のご支援のおかげで楽しく仕事をさせていただき有りがたく存じております。

退職後は趣味のアウトドアの活動に没頭しようと計画をしておりまして、幸運にも宮崎県にございます都城高専の校長を命ぜられ、この4月より着任いたしております。高専教員としての経験を生かして多少なりとも都城高専に貢献ができればと、日々の仕事に向かっています。

都城高専は機械、電気情報、物質、建築と4学科の構成です。建築学科は鈴鹿にはなかったもので、私にとっては新鮮です。都城は県南にあって鹿児島県に隣接しているため、学生も教職員も鹿児島から通ってくる方も多くあります。歴史的にも宮崎より鹿児島との縁が深いようで、方言や風習も鹿児島風です。南九州の県民性は豪快でありつつ温和で思いやりがあると様々な記述にありますが、現実にその通りで大変過ごし易くありがたく思っております。教員や

保護者には都城高専の卒業生が多く、その方々がこの高専に深い愛情を持ち、また、教職員と後援会や同窓会との距離も大変近くて、創立から50年の間に素晴らしい関係を築いてきたのだということが理解でき、鈴鹿高専と似ていて親近感が持てます。周辺には高等教育機関も少なく、本校のステータスも非常に高いのですが、例に漏れず近隣では若年人口の減少が大きな問題で、本校も入学志願者の確保が最重要の課題です。

さて、学校からはどっしりとした高千穂峰がすぐ西側に見えます。周辺は緑の森に恵まれ、湧水も豊富で野菜も肉も安価で大変おいしいところです。家々の広い庭も十分に手入れされているところが多く、立派な庭木と季節の花が咲き誇っています。先に書きましたアウトドアの生活を毎日しているようなものですが、宿舎は鉄筋の5階建て、庭も無く、学校まで歩いて5分なので、体を動かすチャンスが無く、このままではメタボ間違いなしの状況です。周辺には温泉や焼酎の蔵元がたくさんあります。私は、風呂はカラスの行水、アルコールも苦手なので残念ながらこの環境を生かし切れていません。ここにいる間に少し体質を変えられるよう修行をしようと思っております。



■ 高千穂峰

変わらない想いで

たかきの～さいほお～♪ 2011年、2012年の高専祭で教職員バンドを組み、校歌を演奏させていただきました。そこでの学生との一体感は今でも忘れられません。ちょっとばかりの無茶をしてよかったなと思っています。鈴鹿高専で迎えるちょうど5回目の卒業式では、まるで卒業生のような気持ちで、校歌を歌っていました。ここで、僥越ながら退職のご挨拶をさせていただきます。

私の新天地、滋賀大学は経済学部と教育学部からな

教養教育科・数学
篠原 雅史 講師



り、それぞれ別のキャンパスを持ちます。私の所属する教育学部は大津市南部に位置し、国宝建造物を持つ石山寺の近くにあります。自然に囲まれた場所で、6月には近くの川で蛍を見ることもできます。教育学部の学生数は1200名程、キャンパスの大きさも鈴鹿高専と同じくらいでしょうか。そのうち算数・数学専攻には学生70数名(各学年約20名)と7名の教員がいます。規模が小さい分、



■ (上) 滋賀大建物 ■ (下) 滋賀大キャンパス

教員は専攻のほとんどの学生の名前を覚えているようで、これは大学では珍しいのではないかと思います。また、教育学部ということで、国数英理社、情報、教育、芸術、保健体育、など様々な専門を持った教員がいます。この点は鈴鹿高専の教養教育科の様子と似ていて、気軽に色々な専門の話聞くことができます。まだまだ分からないことばかりで戸惑いもありますが、楽し

くやっっていけそうな予感がしています。

鈴鹿高専を離れて4ヶ月が経ちました。大変なこともあったような気がしますが、とても充実した5年間だったと思います。ふと、採用時の面接で「数学の美しさを伝えたい！」とアピールしたことを思い出しました。それがどれほど達成できたのか、はなはだ自信がありません。ただその熱意だけは持ち続けていられたのではないかと思います。これからは、数学教室で作成した基礎数学問題集を通して、未来の高専生にその思いを届けることができれば、と少しばかりの期待を持っています。数学に関係して、創立50周年記念行事の一貫として開かれた数学コンテストを通して、鈴鹿高専の歴史の1ページに関われたことはとてもラッキーだったと思います。高い意識を持った数学教室の先生方と様々な取り組みができ、貴重な経験を積むことができました。教養教育科の先生方には、教員としての心構え、担任のいろは、何より学生に対する情熱を教えてくださいました。研究のあり方について語り合い、楽しいお酒の飲み方を教えて下さった教職員の皆様、原付しか持たない私をツーリングや8耐パレードの仲間に入れて下さったバイク愛好会の皆様、挙げればきりが無い程に多くの方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、皆様のご健康とご活躍を心より祈念いたします。

新任教職員

電子情報工学科

同窓生の皆様、お久しぶりです。

板谷 年也 助教



昨年の10月より電子情報工学科の教員となりました。板谷年也です。実は、同窓会報の2006年号でも新任教職員の挨拶をさせていただきました。その時は技術職員としてでした。その後、学位取得し、この度は、教員となつてのご挨拶です。

この機会に2006年度同窓会報での私の挨拶を読み直しました。「時代の移り変わりの早さを感じるとともに、母校とは何かと考える時があります。そして、その中で自分自身がどれだけ成長できたかという自問自答の毎日を過ごしています。」とありま

した。何か悩みを抱えていた青年だったと思います。その後、青年は少しばかり年を取り、学位取得および教員へ転身ということで、当時より成長できたのではないかと思います。

さて、教員となつての私の抱負は学生の記憶に残る教員を目指さずことです。私の高専時代の特に記憶に残っている先生は硬式野球部の長瀬治男先生、藤松孝裕先生、卒業研究・特別研究の立木滋也先生、川口雅司先生、クラス担任の安富真一先生、中井靖

英先生です。よって目指すところのヒントはここに
あります。幸いにも現在の校務において、クラブ顧
問は硬式野球部、卒業研究は研究室に4名在籍、ク
ラス担任は電子情報工学科の3年生です。「あの時、
先生はこう言っていたな。こういう時、先生は、こ
ういう行動をしていたな」と先生方を思い返して、
毎日仕事をしています。慣れてきたらオリジナルな
面も出していけたらなと考えています。

ところで、鈴鹿高専には、学生時代、職員時代、

教員時代と合わせて15年いますが、年々学校の雰
囲気が変わっているのを感じます。その理由は、鈴
鹿高専が教育研究の高度化や地域の高等教育機関と
して進化しつづけているからではないかと考えま
す。これかも進化しつづけるためにも、ぜひ同窓生
の皆様のさらなる力をお貸し頂ければと存じます。
最後になりますが、今度ともご指導、ご鞭撻ほどよ
ろしくお願い申し上げます。

電子情報工学科

(「鈴風」より転載)

今後ともよろしく願いいたします

飯塚 昇 教授



今年の4月に電子情報工学科の教授に着任した飯
塚昇と申します。よろしく申し上げます。私は、今年
の3月まで企業で研究開発をやっておりました。最初
は色々不慣れで戸惑うこともありましたが、周囲の先
生方のお陰で徐々に慣れてきています。

せっかく紙面を頂きましたので、私の専門分野につ
いて述べてみたいと思います。私の専門は無線通信工
学です。企業では、固定無線、衛星通信、移動体通信
などの研究開発、その中でも携帯電話のインフラ側の
研究開発を主に行ってきました。私が無線通信の研究
開発を始めた当初は、通信工学の中でもマイナーな分
野だったのですが、今世紀に入ってからの携帯電話加
入者数の急速な増加により、今や無線通信ネットワー
クは、電気、ガス、水道と同じレベルの、なくてはな
らないインフラのひとつになっています。無線通信工
学がマイナーな分野だった頃を知る自分としては、感
慨無量といったところです。

携帯電話はiPhoneとiPadの大ヒットによりスマー
トフォンとタブレットの時代に入りました。スマート

フォンは従来の携帯電話と比べ、
比較にならないほど大量のトラ
フィックを発生します。そのため、携帯電話3社の扱
うトラフィックは、現在年間約2倍のペースで増加し
ております。このままのペースでトラフィックが増加
しますと、5年後には現在の約30倍、10年後には
現在の約1000倍のトラフィックが発生することにな
り、携帯電話のネットワークはトラフィックを処理し
きれず破綻してしまいます。当研究室では、そうなら
ないための研究を東北大学電気通信研究所と共同で行
なっています。

私は電子情報工学科5年の担任をやっておまし
て、現在は就職活動のシーズンです。学生達は、私が
企業から来たことを知っていますので、多くの学生が
模擬面接やアドバイスを求めて私の部屋に来ます。高
専の教授としては新米の私ですが、こういったことで
企業人としての経験を生かしつつ、教授としての経験
を積んでいきたいと思っています。今後ともよろしく願
いいたします。

教養教育科

(「鈴風」より転載)

鈴鹿高専に着任して

飯島 和人 助教



皆様こんにちは。この4月から教養教育科の助
教に着任した飯島和人です。科目は数学を担当し
ています。私は昨年度まで、非常勤講師として5
年ほど鈴鹿高専にお世話になっていました。5年
生や専攻科生には過去に担当させてもらった学生
さんが多くいて、彼らの元気そうな姿を見かける

度に自然と顔がほころびます。
現在は3年生の微分積分と
4年生の数学特講(線形代数)を担当しています。
私は、数学においては「話を聴いて理解する」こ
とも大切ですが、「自分で実際に手を動かしてみ
る」ということはより重要なことであると考えて

います。インプットも大事ですが、アウトプット
はもっと重要、ということです。ですので、私の
講義では演習を多く扱っています。一つの講義の
中で、話を理解し、かつ問題も解くというのはな
かなかたいへんなことですが、多くの学生さんが
よく頑張ってくれていると感じています。鈴鹿高
専には数学的に高い能力を備えた学生さんが数多
くいらっしゃるの、専門科目で、あるいは卒業
後もその高い能力を発揮して欲しいと願っていま
す。

鈴鹿高専では、「お互いに挨拶や会釈を交わそう」
ということで、知っている、知らないに関わらず
先生、職員、学生の皆様がすれ違う度に挨拶をし

てくれます。疲れているときや、多少落ち込んで
いるときには凄く元気をもらえます。私の通って
いた高校、大学ではそういった文化のあったとこ
ろはありませんでした。とても良い文化だと思
うので、これからも続けていけるように私も微力な
がら助力したいと思います。

赴任したての若輩者のため、進路相談、部活動、
寮務、事務手続きなど分からないことだらけです。
そういったとき、周りの先生方、事務職員の方々、
学生さん達がいろいろと助けてくれています。こ
の場を借りて感謝申し上げますと共に、今後も精
一杯頑張っていこうと思います。皆様、どうぞよ
ろしく申し上げます。

教養教育科

(「鈴風」より転載)

鈴鹿高専での発見 人と社会とのかかわり

渡邊 潤爾 助教



私は昨年まで3年にわたって非常勤講師としてこ
の学校でお世話になり、多少なりともこの学校、並
びに学生の皆さんのことを知っているつもりでいま
した。しかし今年から常勤の教員としてこの学校に
勤めることになってから、授業以外での学生の皆さ
んとのかかわりが増えてきたことで考えが大きく変
わりました。

まず着任早々に1年生の若狭研修に参加しました。
3日間にわたる研修では学生たちと私的な交流を持
ち、カッター研修をはじめとする共同作業を行うとい
う経験によって学生たちの様々な表情に触れることが
できました。また先輩の先生方にいろいろとお話を伺
うこともあり、この学校のこと、ならびに高等専門学
校のことを少しずつ学ぶことができました。研修中は
少し戸惑うこともあったのですが、この時期に授業以
外の学生生活に触れられたことはこの学校で生活する
うえで非常に大きな意味を持つと感じています。

また卓球部の顧問も勤めさせていただくことにな
りましたが、これも学生たちの生活の多くを占めて
いるものであり、彼らの声と考えるのに有益で
す。このような授業以外の場における学生との接点
が多く設けられているのは本校の特徴であり、長所
だと思います。

私の専門の授業についてお話しさせていただきま
す。私の大学での専門は経済学ですが、本校では広
く社会科学の授業を担当することになりました。経済
学をはじめ、経営学、さらに政治経済といった分

野です。もともと歴史に興味があ
って様々な本を読んでいたが、
大学で経済学を学ぶことで、
これまで社会で起こった出来事
の多くが経済的要因を背景とし
て起こることに思い至りました。

経済学というのは「お金もうけの方法を教える学
問」というイメージを持たれているきらいがありま
すが、お金というのはモノやサービスとの交換手段
に過ぎません。経済学の究極的な目的は、モノ・サー
ビスとお金との交換によって資源をどのように配分
すれば社会的に望ましいかということを探求するこ
とです。それは資源の制約がある中でより良い暮ら
しをするための指針も与えてくれます。その意味で、
社会全体を視野に入れた学問なのです。そのような
問題意識が、組織の運営方法と社会との関わりを学
ぶ経営学、経済と社会の動きとの関連を示す政治
経済の研究へとつながってきたのです。

当校は技術者養成を目的とする理工系主体の教育
機関なので、学生たちは文系科目への関心が薄いか
もしれません。しかしそうではあっても、社会で生
きていくためには社会の事情を学ぶことは必要で
す。そう考えれば、私の担当授業の存在意義もある
わけです(笑)。

冗談はともかく、私の授業では学生の皆さんの専
門分野と社会との関わりを示すようにしたいと思います。
そして学生の皆さんとの触れ合いを深めたい
と考えています。



勲章受章時のお写真(2007年秋)

木村典夫先生を偲ぶ

本校元教員 大阪府立大学大学院教授 岩田 政司(50C 卒)

鈴鹿高専名誉教授 木村典夫先生は、本年3月29日、84歳にて急逝されました。昨年暮れの鈴鹿高専創立50周年記念式典には元気に出席されましたので、突然のご逝去の報にただ驚くばかりでした。木村先生より教えを受けた者のひとりとして、先生を偲び、そのご業績と退官後も20年に亘り続けられたご研究について紹介させていただきます。

木村先生は昭和23年3月旧制名古屋専門学校応用物理学科を卒業され、同年4月名古屋大学工学部機械学科(昭和27年からは化学工学科)井伊谷鋼一研究室に勤務されました。昭和39年に井伊谷先生が京大に移られるまで16年に亘り井伊谷先生の片腕として活躍され、サイクロン、エアフィルター、バグフィルターなどを中心とした集塵に関して精力的に研究されました。鈴鹿高専の退官記念集には、名大当時の木村先生の功績について「物資不足の中で、粉体工学の創成期を支えた功績は大きいものでした。たとえば粉体真密度測定器や3孔式円筒および5孔式球形ピトー管の試作は熟練した手細工の賜物で、これらができて初めてサイクロン等の実験的解明が進んだと言えます。」との井伊谷先生のお言葉が掲載されております。昭和31年の粉体工学会の前身である中部粉体工学研究会(後に粉体工学研究会と改称)創設に際し、井伊谷先生を支え同研究会の運営に尽力されました。また、粉体工学研究会編「粉体粒度測定法」の刊行(昭和40年)にあたっては、ご自身も執筆されるとともに全体の取り纏め役を担われました。

昭和39年4月、開校間もない本校工業化学科に助教授として赴任され、化学工学教育の整備を一手に担われました。予算的制約の大きい中で本格的な学生実験設備を次々と整備され、9期生である筆者の化学工学実験履修時には、大型の固気混相流の実験設備や、ボイラーを熱源とする伝熱実験設備など、「他高専にはない」と自負しておられた多くの実験設備が揃えられていました。また、ご自身の集塵に関するご研究では、繊維充填層・粒子充填層フィルターに関する研究、バグフィルターの捕集効率と圧力損失に関する研究、熱集塵に関する研究、サイクロンの集塵性能に関する研究、遠心式粒度分級機およびサイクロン式粒度分布測定装置の開発などに取り組み、数多くの成果を挙げられました。これらの研究に必要な装置は、粒子の発生装置・検出装置も含め、そのほぼ全てが手作りによるものであり、井伊谷先生が研究室を訪問された折には、その充実ぶりに驚かれたと聞き及んでおります。前出の退官記念集の中で先生は、赴任当初、校舎の建設が学年進行に間に合わず現在の学生実験室を半分にし切って教室に使っていたこと、球技大会で工業化学科が総合優勝した際に担任として2期生諸氏に胴上げされた末に地上へ放り出されたこと、その2期生諸氏とともに高専祭開会に向けて徹夜で準備をされたことなど、お若かった頃のエピソードも記されておられます。

平成4年の本校ご退官まで、通産省内陸工業開発環境保全総合事前調査会委員、三重県公害対策審議会委員、三重県公害審査会委員、三重県公害事前審査会委員、三重県環境影響評価委員会委員、春日井市公害対策協議会委員、三重労働基準局粉じん対策指導委員等を歴任され、その豊かな専門知識とご経験をもって東海地区の環境改善にも取り組まれました。

ご退官の後、集塵に関する体系的な専門書を取り纏めるため、国会図書館をはじめ各地の大学に足を運び、文献・資料の収集に力を注いでおられました。それをもとに一昨年まで執筆を続けられ、ご逝去の知らせに駆けつけた先生の書齋には、刷り上がり1000ページにも及ぶ大作「集塵技術要論」の原稿が遺されておりました。出版社のアドバイスを容れ内容を精選しておられるさなかでのご逝去でした。ご遺族からは、先生のご遺志を尊重し、先生が書きこまれた箇所を修正の後、製本されるおつもりと伺っております。

この件を、木村先生と親交の深かった元新東工業常務参与米田佐氏(元本校非常勤講師、粉体工学担当)に相談したところ、直ちに、牧野尚夫粉体工学会会長らにお諮りいただき、木村先生のご遺志を生かすべくいろいろとご配慮をいただきました。

粉体工学会の前身である中部粉体工学研究会の創設期を支えられ、その後、設立間もない本校の化学工学教育に多大な貢献をされるとともに、ご退官の後も学間に対する情熱を抱き続け、集塵技術に関する大著を遺された恩師木村典夫先生に対し尊敬の念を新たにいたしました。先生のご冥福を心からお祈りいたします。



勲章受章お祝い会にて(2008年春)

＝ 訃 報 ＝

澤辺昭廣技術専門職員は9月19日に逝去されました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

誌 名 青峰同窓会会報

発行日 2013年10月

発 行 国立鈴鹿工業高等専門学校 青峰同窓会 広報委員会

〒510-0294 鈴鹿市白子町

TEL : 059-386-1031 E-mail : almn@suzuka-ct.ac.jp